

チェコ（2025年度）

- [国・地域別情報トップページへ](#)
- [各国・地域情勢](#)
- [在チェコ日本国大使館](#)

1. 2024年度日本語教育機関調査結果
2. 日本語教育の実施状況
3. 教育制度と外国語教育
4. 学習環境
5. 教師
6. 教師会
7. 日本語教師派遣情報
8. シラバス・ガイドライン
9. 評価・試験
10. 日本語教育略史

1.2024年度日本語教育機関調査結果

初等教育			中等教育			高等教育			学校教育以外			全体の合計		
機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数
0	0	0	4	5	64	5	28	688	14	73	961	23	106	1,713

（注）2024年度日本語教育機関調査は、2024年9月～12月に国際交流基金（JF）が実施した調査です。また、調査対象となった機関の中から、回答のあった機関の結果を取りまとめたものです。そのため、当ページの文中の数値とは異なる場合があります。

[「海外日本語教育機関調査」のページへ](#)

2.日本語教育の実施状況

全体的状況

沿革

1947年に、プラハにあるカレル大学に日本研究学科が創設され、チェコスロバキア（当時）における日本語教育が本格的に始まった。

1993年にはオロモウツにあるパラツキー大学にも日本学科が設置された。また、1990年代以降、チェコ第二の都市ブルノにあるマサリク大学、第三の都市オストラヴァのオストラヴァ大学で、選択科目として日本語のコースが（エキゾチック言語コースの一つとして）開設された。中等教育機関では、1991年にプラハにあるギムナジウムにおいて初めて外国語教育に日本語が取り入れられた。

2008年10月にはブルノのマサリク大学に日本研究学科が設立された。

中等教育機関（ギムナジウムと呼ばれ日本の高等学校にあたる4年間から6年間の教育機関）でも、自由選択科目第三外国語として日本語を設定している高校が確認されている。

一般教育機関では、プラハ市立言語学校（当時はプラハ国立言語学校）が1952年から、チェコ・日本友好協会でも1998年から日本語のコースを開設している。

現在は、私立の語学学校などでも日本語クラスを開設する学校が複数確認されている。例えば、専門的に毎日日本語を学習する「高校卒業後学習 pomaturitni studium」が Spěváček 及び Japanese Point で実施されている。この課程を高等教育機関への予備コースとして大学入学試験の準備をする学習者もいる。

2007 年秋に日本センター・ブルノがオープンし、大学生や一般成人向けの日本語授業がスタートし、プラハ以外の都市でも日本語を学ぶことができるようになった。加えて、インターネットが発達したことで、語学学校に通わず、オンライン教師を見つけて日本語を学ぶ人も増えてきている。また、オンラインツールを活用し、独学する者もいる。

日本企業でも、日本語学習を奨励したり、従業員に日本語教育を行ったりしているところもある。

2008 年度よりプラハ市立言語学校が国家試験実施校となり、2009 年度からはチェコ国内で唯一 CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）基準の試験が実施されているものの、日本語能力試験（JLPT）受験への移行が見られ、2026 年 1 月現在、CEFR 基準試験の受験者はいない。日本語教師会が主体となって、2003 年より JLPT の模擬試験が開始され、2010 年からブルノ市で冬に 1 回 JLPT が実施されるようになった（2022 年及び 2023 年は夏・冬 2 回開催）。なお、2025 年 12 月の受験者数は、456 名を数えた。

背景

1989 年のビロード革命、1993 年のチェコの分離・独立以降、日本・チェコの両国は友好的な関係を築いている。また、チェコの経済発展に伴い、2024 年時点で、280 社の日本企業がチェコに進出している（[外務省ウェブサイト チェコ共和国基礎データ](#)）。なかでも製造業の比率が高く、習得した日本語をビジネスの場面で生かしている者も多い。さらに武道、邦楽など伝統的な文化や、マンガ・アニメなど日本のポップカルチャーの人気が高い。

特徴

従来、高等教育機関での日本語教育が盛んであったが、中等教育機関、あるいは学校教育以外の機関での日本語学習者も増えつつあり、近年は特に若年層で増加の傾向にある。

学習動機について、以前は日本の伝統文化への興味が主であったが、アニメなどのポップカルチャーの影響から日本語学習を始める若い学習者が増えてきている。また、自らの母語とは大きく異なる「めずらしい言語」「おもしろい言葉」として日本語を学習しようとする人や、シニア世代でも生涯学習の一環として日本語を学習しようとする動きが現れてきた。また、日本人とチェコ人夫婦の間に生まれ、継承語として日本語を学習する子どもも存在する。

最新動向

当地における日本語学習者の数は全体として年々増加傾向にある。複数の語学学校では、特に 10 代・20 代の若い世代が多い。日本センターブルノでは、グループレッスンよりも個別レッスンを希望する学習者が増加している。

最近、日本への旅行のために日本語を勉強したいという学習者が増え、旅行で使える「サバイバル日本語」の需要が高まっている。また、日本への旅行を通して日本語や日本文化に関心を持ち、帰国後学習を開始するという人も増えている。加えて、日本語の勉強のみならず、書道や着物など日本文化への関心が高まっている。

また、チェコ人以外の外国人の日本語学習者増加が傾向として挙げられる。日本企業による日本文化理解を促

す行事が行われるなど、日本語教育に力を入れている日本企業もある。一方で、日本企業では通訳業務などの日本語能力よりもマネジメント能力が評価され、日本語を話さないチェコ人が管理職として採用されるケースもある。

教育段階別の状況

初等教育

トヨタ・プジョー・シトロエン・オートモビル（TPCA）社の工場があるコリーン市において、2006年より小中学校3校でクラブ活動の一環として日本語教育が行われていたが、2010年に同社による支援が終了して以来、行われていない。

中等教育

ギムナジウムなどの中等教育機関で外国語教育に日本語を取り入れる学校も現れている。現在、プラハ市内を中心に数校のギムナジウムにおいて、第三外国語としての日本語クラスが設けられ、選択科目の1つとなっている。日本語クラス開設は学校長の裁量により決定される。プラハ市のサーザフスカー高校では、選択クラスとして45分の授業が週に3コマ実施されている。

また日本との文化交流に熱心なリトミシュル市では、高校の選択科目として週1回の日本語のクラスがあり、日本の高校への短期留学も行われている。

プラハ市にあるアマゾン高校（私立）では日本語が正規の第2外国語として週に4時間の授業があるほか、学習者からの相談に応じるコンサルティングが1時間行われている。成績はこまめに数値化され、オンラインで父兄にフィードバックされるシステムを持つ。

高等教育

カレル大学、マサリク大学には日本研究、パラツキー大学には日本語専攻の学科がある。これらの学科では毎年数名が日本へ留学し、卒業後は通訳者・翻訳者として活動する者や、教師・研究者となる者もいる。同大学のほかには、チェコ工科大学、リベレツ工科大学、メトロポリタン大学（プラハ）、あるいはピルゼン市の西ボヘミア大学でも、選択科目として日本語の授業が開講されている。

学校教育以外

当地で始めて日本語コースを開講したプラハ市立言語学校は主に成人の学習者を対象としている。一方、同じくプラハにあるチェコ・日本友好協会の日本語講座には、成人や高校生の学習者もいるほか、10～13歳の子どもクラスも設けられている。同協会は日本語教育だけでなく、書道、墨絵、歴史講座、さまざまな文化紹介ワークショップも開催している。また、複数の語学学校において、10代の学習者の数が増加している。

ブルノ市にある日本センター・ブルノでも、小学校低学年から70歳代までの幅広い年齢層の学習者が日本語学習に取り組んでいる。

また、プラハ市内及び日本センター・ブルノでは、日本人とチェコ人の間に生まれた子どもを対象に、継承語としての日本語クラスが開講されており、年齢や時間に応じて、日本文化理解も含めた日本語が学ばれている。

当地に進出している日本企業、また日本企業と取引のあるチェコの企業の中には、ビジネスのための日本語クラスを開講しているところもある。

3.教育制度と外国語教育

教育制度

教育制度

9-4 制。

初等教育は通常 9 年間（6～15 歳）、中等教育は 3～4 年間（15～19 歳）であり、後者については通常の学校のほか、ギムナジウム、専門学校等でも行われる。少数であるが成績優秀者は、5 年で初等教育機関から中等教育機関へ移り、中等教育を 8 年間受ける者もいる。6 歳からの 9 年間は義務教育。

高等教育機関は主に大学で、専門によって 3 年から 5 年の教育を受ける。ボローニャ宣言を受けて、新たに学士制度が設けられ、従来の 5 年間で修士号を取得するシステムから、学士課程（3 年）と修士課程（2 年）に分けるシステムへと変更している学科が多い。

教育行政

初等、中等、高等教育機関のほとんどが教育省の管轄下にあるが、公立校においても授業内容などに関して各学校長の裁量権が大きい。

言語事情

主要言語、公用語のどちらもチェコ語。

外国語教育

初等教育課程では、第 3 学年から外国語学習（英語）が開始されている。なお、カリキュラム改定によって、2027 年 9 月からは第 1 学年から必修化される予定である。

中等教育では第 2 学年から第二外国語の学習が必修となっており、主にドイツ語、フランス語、スペイン語から選択される。

外国語の中での日本語の人気

カレル大学において、2025-26 年度の受験者数と入学者数は、日本研究学科が 133 名中 30 名、韓国研究学科が 112 名中 20 名、中国研究学科は 51 名中 22 名であった。日・韓研究は同じアジア研究所内に設置されており、両国の文化に関心を寄せ、両言語を学ぶ学生も少なくない。日本研究学科の応募者はカレル大学の言語教育を含む学科（英語を除く）において一番応募の多い学科である。なお、マサリク大学、パラツキー大学においても同様である。

大学入試での日本語の扱い

大学入試の一般試験科目として日本語は扱われていない。

ただし、カレル大学とマサリク大学の日本研究科で実施されている入学試験には、日本語の表記（ひらがな・カタカナ）及び日本に関する知識を問う試験が含まれている。カレル大学では、漢字知識も出題される傾向にあ

る。

4.学習環境

教材

初等教育

日本語教育の実施は確認されていない。

中等教育

『みんなの日本語 初級』スリーエーネットワーク（スリーエーネットワーク）、『初級日本語 げんき』坂野永理ほか（ジャパンタイムズ）、『まるごと 日本のことばと文化』独立行政法人国際交流基金（三修社）のほか、チェコ語で書かれた教科書『初級日本語 Japonstina』（LEDA）が使用されている。

高等教育

『みんなの日本語 初級』（前出）、『中級へ行こう』『中級を学ぼう』平井悦子ほか（スリーエーネットワーク）、『文化中級日本語』文化外国語専門学校（凡人社）、『中級の日本語』三浦昭ほか（ジャパンタイムズ）などのほか、パラツキー大学では独自に編纂した初級教科書を使用している。

学校教育以外

チェコ・日本友好協会から2007年に出版された『絵でおぼえるひらがな』、同じく2010年に出版された『絵でおぼえるカタカナ』、『絵でおぼえる漢字』（2014年出版）、『Situational Functional Japanese』筑波ランゲージグループ（凡人社）、『みんなの日本語 初級』（前出）、『初級日本語 げんき』（前出）、『Japanese for Busy People』国際日本語普及協会（講談社 USA）、『会話の授業を楽しくするコミュニケーションのためのクラス活動40』安部達雄ほか（スリーエーネットワーク）、『毎日の聞き取り』宮城幸枝ほか（凡人社）等のほか、言語学校で独自に編纂された教科書も使用されている。また、一部の機関の成人向けクラスでは『まるごと』（前出）が主教材として使われている。

IT・視聴覚機材

大学などでは学生の成績管理はオンラインで一括管理されており、カリキュラム情報などの提供にもインターネットが利用されている。学内ネットワークが完備されており、講師から個々の学生への連絡、教材の配布、課題の提出などにもこれらが活用されている。

こうした学習管理システムやITツールの活用は2020-21年のパンデミックを経てさらに活発になった。2026年現在、従来の教材や機材にITが加わったことで、反転授業を取り入れた教授法の改善や生成AIの活用など新たな試みも行われている。

5.教師

資格要件

初等教育

修士号以上

中等教育

修士号以上

高等教育

修士号以上

学校教育以外

教育機関によってさまざまであるが、チェコの大学を卒業していることを条件としているところもある。

日本語教師養成機関（プログラム）

日本研究、日本語専攻を持つ大学は3つ（カレル大学、マサリク大学、パラツキー大学）があるが、日本語教授法などの教師養成のためのコースや講義は開講されていない。

日本語のネイティブ教師（日本人教師）の雇用状況とその役割

日本研究、日本語専攻を持つ3大学（カレル大学、マサリク大学、パラツキー大学）はそれぞれ日本人教員（専任・非常勤を含む）を雇用しているほか、他の言語学校や教室でも現地採用の日本人教師を雇用している。数か月から2年程度の雇用契約で採用され、複数の学校・機関を掛けもちで教えている講師もいる。

教師研修

現職の日本語教師対象の研修制度は国内にはないが、JF 日本語国際センターの公募研修プログラムへの参加や、ブダペスト日本文化センターの中東欧日本語教育研修会（2008年度から実施）などに参加している。また、日本語教師会の月例会での勉強会や、弁論大会開催時に合わせ、国外から講師を招いてワークショップなどを開催することもある。

現職教師研修プログラム（一覧）

なし

6.教師会**日本語教育関係のネットワークの状況**

当初はJF派遣の日本語専門家を中心に勉強会が行われ、2005年からメーリングリストの整備などの段階を経て、2007年1月に教師会が正式に発足した。毎月1回（年10回）の定例会やメーリングリストでのやりとりは教師会の活動の一環として続いており、2013年には教師会ウェブサイトが開設、2022年に一新された。<https://www.jf.go.jp/japanese/education/teachers/>

[//www.kyoshikai.com/ja](http://www.kyoshikai.com/ja))

2007 年秋には、教師会メンバーによる自主制作教材『絵でおぼえるひらがな』、2010 年春には『絵でおぼえるカタカナ』、2014 年 3 月には同シリーズの漢字教材『絵でおぼえる漢字』を、また、2020 年春には『初級読解教材 よんで』を出版した。その他、日本や隣国から講師を招いてワークショップなども開催している。メンバーは 2025 年 1 月時点で 15 名ほどである。

会員にはチェコ人をはじめとする日本語非母語話者教師も一定数いるが、日本語母語話者の会員に比べると、まだ人数は少ない。教師会の活動や会員間のネットワークは安定しているものの、さらなる新規加入者（日本人・チェコ人双方）の増加や、地方での学習者数とその学習方法の把握など、今後どのように活動の輪を広げていくかが課題となっている。

最新動向

毎年春に弁論大会と作文コンテストが教師会の主催により開催されている。同大会は、中東欧地域で最古の歴史を持ち、2026 年に第 50 回という大きな節目を迎える。

[教師会・学会一覧へ](#)

7.日本語教師派遣情報

国際交流基金からの派遣

JF からの派遣は行われていない。

その他からの派遣

(情報なし)

8.シラバス・ガイドライン

統一シラバス、ガイドライン、カリキュラムはない。

9.評価・試験

評価・試験の種類

共通の評価基準や試験はない。

10.日本語教育略史

1947 年

カレル大学に日本語研究学科創設

1952年	プラハ市立言語学校で日本語コースを開設
1991年	プラハにあるギムナジウムが、中等教育で初めて日本語教育を開始
1992年	マサリク大学（ブルノ）で選択科目として日本語コース開設
1993年	バラツキー大学に日本学科設置
1998年	チェコ・日本友好協会で日本語コース開設 西ボヘミア大学（ビルゼン）で選択科目として日本語コース開設
2006年	コリーン市の学校でクラブ活動の一環として、初等教育で初めて日本語教育を実施
2007年	日本センター・ブルノが開所し、大学生や一般成人向けの日本語授業開始
2008年	プラハ市言語学校が国家試験実施校となる マサリク大学（ブルノ）に日本研究学科設立
2009年	プラハ市言語学校がチェコ国内で唯一 CEFR 基準の試験を実施
2010年	チェコ南東部のブルノ市においてチェコで初めてとなる日本語能力試験 JLPT を実施、現在に至る。

情報更新についてのお願い

この国の日本語教育に関する情報がありましたらお知らせくださるようお願いいたします。
なお、内容の確認のため、こちらからご連絡する場合があります。

Eメール：kunibetsu@jpf.go.jp

（メールを送る際は、全角@マークを半角@マークに変更してください）